

第23号

1 直近の活動

5月07日(日)幹事会

5月14日(日)金属部会CPD技術セミナー7「歴史金属学」・・・104人参加。講演後楽しい飲み会。

5月17日(土)部会長会議・・・久しぶりの会費制の一次会・二次会飲み会付きで疲れた。

5月20日(土)二次試験合格者歓迎会・・・1名のリアル参加者。飲んで帰宅すると0時を超える。

5月25日(木)四部会連絡会2回目（繊維・化学・資源・金属）他部会との会話は少々疲れる。

5月27日(日)金属部会定例部会(5月分)・・・57名参加。完全オンライン開催で楽だった。

5月30日(火)中部本部三部会合同部会との全国大会打ち合わせ。他部門と疲れる。

2 今後の活動予定(直近1ヶ月分)

6月01日(木)金属部会臨時執行役員会

6月04日(日)金属部会幹事会

6月10日(土)中国本部金属部会員・執行役交流会（広島）リアル会合。

6月11日(日)中部本部金属部会員・執行役交流会（名古屋）リアル会合。

6月18日(日)「企業内技術士勉強会（第一回）」～12月までの予定で行います。

6月25日(日)金属部会定例部会(6月分) 執行役交代ご苦労さん会もあります。

3 部会四方山

▶5月は、行事がかなり多かった。最近のアンケートでも「行事を減らすように」とか「補助金以内で行事が回るように行事を考える」とか「事務局に返納金が出るのはやりっぱなしの証拠」などというご指摘がある。▶行事が多いならば参加を減らしていただければ済む話だし、補助金の額が部会の講演者数の上限だとは思わないし、返納金が出るのは、全国展開、他部会も受け入れての会合をしているので講演回数も増えるのであって、補助金の金額の決め方のルールが実態についてこれていない（金属部会の補助金は関東圏の人数比で配布されている）ので、どれを減らそうかという議論ではなく、実態にあった補助金制度を提案すればいいのではないかと思う。まあ、収支決算は5月定例部会でもご説明したように部会活動が健全に回るレベルになっているので、ご心配には及ばないが。▶ただ、正直2年間の部会長をさせてもらい、昨年だけでも、交通費や出張費が全部自腹で行ない、数十万単位の出費になっている上に、無制限の時間拘束がある役職にであることがちょっと気がかりだ。まあ苦情ではないが、何にモチベーションを見出せばいいのかということだ。これまでの諸先輩や現在の同様の立場の人々が文句も言わずに仕事に勤しんでいられる姿を見るにつけ・・・▶まあ、小生のモチベーションは、全国の金属部会員の皆さんが元気に活動をされて、「技術士でよかった。金属部会でよかった」と思っていたことだけを考えて、損得抜きで目の前の仕事をする、この一点だけである。それでなければ、まだまだ生々しい議論をしなければならぬ世代の人間として、ボランティアの領域を超えるボリュームの仕事が降ってくる役職をこなしていけない。行事頻度を下げればとか、勉強会をやめればという話もあるが、それ

はそれでモチベーションの一環なので、苦勞ではない。3～5月にかけての報告書作成をはじめとする自分でやるしかない様々な「義務」は、よく諸先輩方はこなされてきたと感心し、ご苦勞があったんだろうなと推察する次第である。▶まあ、根がいい加減で、物事をあまり深刻に考えないタチなので結構ドタバタを楽しんでいるところもある。ただ、仕事はルーチンなので年を追うごとに慣れてきてテキパキできるはずなのだが、慣れて短縮した時間を新しいことに使ってしまう貧乏性の性格が災いして、いつも安定のドタバタである。考えてみれば、会社時代も全く同じであり、常にテンパった状態だった。多分この性分は死ぬまで治らないと思いつている。▶そんなことを考えながら、また「企業内技術士勉強会」やら地域連携の新たなやり方を始めようとしている自分がある。以上

4 和鐵管見 21

「四方山」がハードだったので、ここは柔らかくいきたい（単に手抜きということかもしれないが）。小生は、10年ほど前、松岡正剛さんの塾の門下生であった。文章や発想法などを、ものすごい勢いで学ぶ講座で、師範代になった。自分で指導する弟子を取る前に離れた（というのも、その組織で活動するより、それを広める道を選んだため）。その修行の中で、文章コンテストがあった。映画の換骨奪胎で物語を作るという修行だったが、同期の塾生数十人の中で、なんとか大賞を取ることができた。元の映画は「エイリアン」。これを元に作った物語を今月は紹介する。まあ、小生の考えていることがいかに変なのかバれてしまいそうだが。

【アリストテレス賞：大賞】

■田中和明（フェアリー茶色教室）

原作：エイリアン

『ザ・ドール』

1 住み慣れた日常から異次元へ集められた仲間

私の名はセルフ。理不尽な上司やクレームに毎日悩まされ、仕事に退屈し、いつも空想に耽っている。理想の人と理想の部屋で永遠に暮らす事を夢見ている現実逃避型の人間だ。実際の私は、怒りっぽく、何でも悲観的に考え、趣味の音楽にも全く自信が持てない。

ある夜、仕事に疲れ果てて家路についていた私は、街角でのっぺりとした木彫りの人形に出会った。人形はビルの植込みの陰にひっそりと立っていた。何となく気になり、私は人形を鞆に押し込んだ。

深夜ふと目覚めると、私はベッドではなく黒漆の闇の中に立っていた。目が慣れると、黒々とした丘の上に城が浮かび上がってきた。次に我に返った時、静寂の城の広間に一人で立っていた。そして今、広間の中央で、私は他の3人と会話をしていた。「確かに傘を広げながら大学の通用門の扉をくぐったのだが、何故かこんなところに来ておる。何なのだ、ここは」アンガーと名乗った男は、苛立っていた。「軽食スタンドでトレイを棚に戻した瞬間に、ぬかるみ道に立っていたの。ここは、どこ。また酷い目に会うのかしら」サディ

一と自己紹介した女性は、悲しそうに呟いた。「ライブの準備で店の扉を開けたらここにいた」パンクヘヤのホープは、ギターをかき鳴らした。「でもこの雰囲気、いけてるね」「私はセルフ。私も気がついたらここに立っていた」他の3人とは初めて会ったはずなのに他人のような気がしない。昔からの知己のような気がした。

2 安らぎを得るドールの世界

「この部屋はなんだろう」ギター片手に、ホープはホール横の扉に向かった。勢い良く扉を開けると、部屋はキャンドルで明るく照らされていた。部屋の真ん中に長椅子に横たわった死体があった。部屋はたった今迄誰かがいたような明るい雰囲気だった。「死因は何だ」長椅子の死体を観察しながらアンガーは呟いた。「どうも腑に落ちん。これは奇妙な死に方じゃ」「このおじさん、笑っているわ」サディーは沈んだ声でいった。「笑いながら死ぬなんて嫌だわね」ホープが床に落ちていた紙を拾い上げた。「『私はドール。私と共に安らぎを得よ』だって」「このおじさんは、安らぎを得て死んだのかしら」「何が安らぎだ。部屋に籠って死ぬことが意味のある事か」アンガーは苛立った口調で言った。私には分かっていた。ドールは城の各部屋にいて、入ってきた者の願望の姿に変化し、虜にする。ドールに虜にされた者は、理想の部屋で理想の人と死ぬまで夢を見るのだ。この世界は、私が思い描いてきた世界だ。しかし、虜にされた人は、二度と部屋の外にでられない。この部屋の主の様に。まるで格子の入った楽園ではないか。私まで虜にされてはいけない。

3 ドールの城の恐ろしい秘密

「みんな聞いてくれ」3人が私の周りに集まってきた。「この城の各部屋にはドールがいる」「ドールってなんだい」「ドールは、部屋に入る者の心の願望を読み取り、『契約』で人を部屋の虜にする。人の弱い心に入り込む怪物だ」「学者の僕には、願望や弱い心なぞない」「私も、理想や願望などとっくに捨ててしまったわ」

「僕は23世紀の音楽演奏ロボットだから、心なんか元々ないよ」

「君達は、この城の虜になりたいのか」誰も、私の話を本気に聞かない。「頼むから、真面目に聞いてくれ。部屋でドールに話しかけられても答えてはいけない。二度と元の世界に戻れなくなくなるぞ」

アンガーは、自分の現在の体験が説明できず怒っていた。「納得いかん。不連続時空を研究せにゃならん。書齋はないか」階段を昇りながら呟いていた。「人生って困った事ばかり、誰も信じられないわ」サディーも2階へ向かった。広場には私とホープが残った。

4 ドールの虜にされる仲間たち

アンガーが扉のノブを握る寸前、部屋には蜘蛛の巣が張っていた。扉を開けた瞬間、蔵書と測定器械で溢れた書斎になっていた。美しい女教師が立っていた。「アンガーくん、遅刻よ」ばっくりと口を開けたま後ろ手にドアを閉める。「ぼ、僕。ごめんなさい先生」

扉の向こうには王子がいた。「君を待っていたよ、サディー」姿見には夜会服の淑女が映っている。「私の王子様」ゆっくりとサディーは王子へ歩み寄った。広間では、2人が静まり返った2階を見上げている。「何かおかしいぞ、探しに行こう」ホープが言った。

後ろ手に組んでアンガーを覗き込む女教師がいた。アンガーは女教師を凝視していた。「いいこと、先生と一緒に勉強したければ、『はい』と言うのよ」いきなり扉が開いてホープが部屋に飛び込んできた。部屋の中央にアンガーが倒れていた。「大丈夫か」抱き起こしながらホープが訊ねる。「下へ運ぼう」私は言った。

アンガーが目をさました。「何があったんだ」ホープが聞いた。「先生がいた。一緒にいたければ『はい』と言いなさいと言われた」アンガーはまるで子供のような話し方だった。「どうして、僕を連れ出したんだ」跳ね起きたアンガーは2階へ駆け上がり扉を閉めた。部屋に戻ったアンガーはドールと会話をしている。アンガーには女教師に見える。「戻って来たのね。で、お答えは？」「『はい』です先生」とたんに書斎が収縮し、アンガーはドールに吸収された。「僕と一緒に暮らそうよ、プリンセス。サディーの答えはどうなの」「『はい』ですわ、私の王子様」サディーは、幸せそうに答えた。「2人とも消えてしまった」アンガーを追いかけて2階に駆け上がったホープは、空っぽの部屋を見つめながら呟いた。「ドールは本当にいるのか。僕も会いたい。僕の音楽は素敵なのに生きた音楽にならない。ドールに会えれば僕は理想の世界に生きられる」ホープは隣室に飛び込んだ。ものすごい振動が城を揺るがす。部屋ではホープとドールが向かい合って共鳴していた。振動で部屋が発火する。「僕は理想の世界に出会えたぞ」衣服も人造肌も燃え尽き、なめらかな金属ボディをさらしながらホープが叫ぶ。「これで僕の音楽も完璧だ」炎で天井が崩れ落ちた。ドールの城が劫火に包まれた。

5 ドールの城からの脱出と人形への誓い

私は、階段を駆け下り、広間を横切り、外界への扉を開けた。扉の向こうには、広大な空間が広がり、大勢のドールが立ちはだかっていた。「セルフ、あなたの理想の人は」「君の感情を開きたまえ」「きっと、あなたの希望を叶えてさしあげるわ」しかし、私には理

想の部屋も理想の人も見えなかった。どのドールものっぺらぼうの木彫り人形のままだった。「君には、理想も希望もないのか」。

気がつけば、私は自分の部屋のベッドでびっしょりと汗をかいていた。枕元には、昨夜拾った木彫り人形があった。夢だったのか。他の3人の行動が、私の心の奥底の願望だったことが、今はっきりと分かった。無意識に現実から逃げようとする私の弱い心をドールは虜にしたのだ。私は、自分が虜にされなかった安堵感で、人形に手を伸ばした。とその時、人形が光を放ちドールに変身した。「セルフ、君の理想は？」ドールが私の現実の世界まで追いかけてきた。「もう、空想の世界はたくさんだ」ドールに向かい私は叫んだ。夢から醒めた私は、現実逃避をするのはもう止めるよと人形に誓った。

◆講評◆

原作のミームを生かしながら翻案し、いかに換骨奪胎して別ものとするかは、物語編集の最大の課題。夢見る若者の脳内ファンタジーとも読める本作の編集プロセスは、この課題に鳥の眼・虫の眼方式で挑みました。

田中さんは、ストーリーの流れやシーン、登場人物の関係性は映画に倣いつつ、「らしさ」をつなぐ螺子を逆回転に。これにより、原作に忠実でありながら大きな飛び幅が実現。また、「肉体と精神」「夢と現実」「理想追求と現実逃避」などの対立する二項がドミノ倒しのように次々と反転して境目を失い、悪夢のワールドモデルが構築されました。

大きな構造はサクッと変えてしまい、細かい箇所はきめ細やかな見立ての妙でじりじりつないでいく。その二つが動力となれば、ストーリーは自走します。

「エイリアン」のメッセージは、主人公の内的抗争がそのまま生存の可否につながり、外界の運命も左右するという内→外の動きに支えられましたが、『ザ・ドール』では不快な外敵から身を守る居城が、脱出不可能な「格子の入った楽園」として精神を浸蝕する、外から内への警鐘が鳴らされました。

文章には若干荒削りな未完成が残ったものの、細心と大胆によるリバーズエンジニアリングは、今期随一。「自己とは」「希望とは」「感情や意欲とは」と、読者に概念工事を促す本作に、アリストテレス大賞を贈ります。